

目次

はじめに	
五十六の誕生	／ 11
高野家の先祖	／ 13
阪之上小学校・長岡中学校に入る	／ 16
長岡の冬	／ 20
海軍兵学校を志望	／ 24
やせ我慢	／ 28
日本海海戦	／ 32
海上勤務	／ 38
父母の死	／ 41
海軍省勤務	／ 45
結婚	／ 49
アメリカ留学	／ 53
軍備の研究	／ 57
霞ヶ浦航空隊	／ 59
軍縮会議	／ 66
会議は敗北	／ 69
親友堀悌吉	／ 72
三国同盟に反対	／ 78
連合艦隊司令長官	／ 83
作戦計画	／ 87

開戦反対と真珠湾攻撃 / 90

別れ / 94

巨星墜つ / 97

山本五十六の慧眼 / 101

今に伝わる山本五十六 / 104

山本五十六のエスプリ / 107

山本五十六関係年譜 / 110

あとがき / 115

はじめに

山本五十六いそろくは長岡が生んだ世界的人物である。その戦略構想もさることながら、人間的魅力においても、第一級の人物であった。郷土史的に見ても、長岡らしい土くさい人間性を持っている。

郷里長岡で、山本五十六を支えた友人の一人であった橋本禪巖ぜんがん和尚は、次のように、山本五十六の人間像を語っている。

「しかし、ある意味では正体のつかめない人間、質実剛健、愛想無しで、底の知れないという長岡人の典型のような男で、突然、ひょいとあんな人物が出て来るものではない。長岡藩が三百年かかって、最後に作り出した人間であろう」

橋本禪巖は大分県の出身。五十六より十歳年下だが、旧制宇佐うさ中学校を卒業すると禅門に入り修行した。越後六日町（新潟県南魚沼市）の雲洞庵うんとうあんにあった際、山本五十六の親友駒形宇太うた

七が長岡市御山町に堅正寺という禅道場を創建するにあたり招かれた。駒形宇太七は五十六と旧制長岡中学校の同級であり、親友であった。商人出身で浄土真宗門徒であったが、商人には禅が必要だとし、私費で禅道場をつくり、長岡の人びとに修養を説いた。

そこに招かれた橋本禅巖と山本五十六は終生、通じ合うものがあり交流があった。山本五十六が三国同盟に反対して、海軍次官を降りようとしたとき、郷里長岡に帰って、堅正寺に籠ったことがあった。そのとき、禅巖和尚と山本五十六は、縁側にあった椅子に座り、テーブルを間にし、たわいもない話を続けたという。

決して、己の苦悩を言葉にしない五十六を、禅巖和尚は、「この男は、長岡藩がつくった人物だ」と評したのである。

橋本禅巖は、山本五十六が戦死ののち、戒名を五十六のために授けている。「大義院殿誠忠長陵大居士」である。

長陵は長岡の地名の別称だからいかにも長岡らしい。

五十六は父高野貞吉の五十六歳のときの子どもである。長岡では山本五十六のことを「五十さ」と呼んだ。三河武士の流れをくむ長岡藩士は、尊称に「さ」をつけたのである。父貞吉の

日記には五十六とあるので、略して「いそ」といつていたものが、次第に尊称の「さ」をつけたのだろう。

父の影響をはやくうけており、五十六には漢学の素養があつた。儒学者の家柄であつたからもちろんであろうが、習字することは家では必須であつたらしい。少年にもかかわらず立派な文字を書いたのはその影響である。

だから、若くして号名を持ち「江東陳人」と称した。江東とは信濃川の東岸長岡の町に住むというのであろう。兵学校時代は「樵夫」と号している。山に住む樵のようなものだというのである。

どちらの号も故郷長岡を強く意識したものである。長陵と号するのは中年以降の話だが、長陵そのものが「長岡」の地名で、旧制長岡中学校歌では生徒を「長陵健児」とした。長陵の号は長岡出身であることを強く意識したものであつたことはまちがいない。

また、よく揮毫すると署名を「山本五」で止めた。五とは五常の徳の仁義禮智信をさし、自らも五にこだわった。

晩年になるにつれ、揮毫の語尾に力を置き、墨筆をとどめ太く終わらせることが多くなつた。

その橋本禅巖が昭和五十年代の初め、山本五十六のことで講演を頼まれたことがあった。山本五十六の人間像を紹介してほしいというのである。

橋本は講演のために、その要旨をつくっている。そのとき、話した内容が、彼の講義録「正法眼蔵四摂法之卷模壁」に載っている。これは、橋本禅巖があらためて日本互尊社の勉強会のなかで、仏教講話として、記述されたものであるが、禅における愛語を説明した一節にある。「人間として、人を育てるには厳しい躰しつけも必要であります、相手に対して赤ん坊に対すると同じような心を忘れてはなりません。深い親心から出た言葉は皆、愛語で、立派な自覚を持たせるための言葉なのであります」

「山本さんがやって見せ、説いて聞かせて、やらせてみ、讚ほめてやらねば、人は動かぬと、良く申されていましたが、仕事を教えるのでも讚めてやると云うことが、秘訣のようであります。讚めると云うことは、馬鹿な奴をおだてると云うことではなく、共に喜ぶことなのであります」
堅正寺住職橋本禅巖師は、山本五十六のよき理解者であった。禅を通して、山本五十六の人物像を良く知って、その人間性豊かな五十六の前歴から、きらりと光る戦略眼と持ち前の先見性を見抜いていた。

五十六は幼いころ、ひどい「はにかみや」であったという。近くの神社の祭礼で盆舞をみて、鬼が登場すると「オッカナイ」と、姉のカズの陰に隠れたというのである。橋本禅巖師は、山本五十六がはにかみやでユーモアのセンスを持つ人物だと語っているが、彼の性格は越後長岡の精神土壌のうえに成立したものでろうと断定している。

山本五十六は越後長岡人の特性を色濃く持っている。寡黙で実行力があつた。その不言実行型の美德が、後年、心を通わせた一部の者にしか伝わらなくて、作戦に齟齬そごをきたすこともあつた。ものごとくに誠実だつたからこそ、上司や部下の前でも喜怒哀楽の感情を表すことがあつた。ただ武士の末裔としての誇りがあつたから、悲しみや楽しみの感情には抑制の心が制したきらいがある。

常に危機に備える考え方が出身の長岡藩にあつたから、緻密な計画性と冷静な対処法が、海軍軍人としての資質を高めた。合理的思考を大切にし、また、それに反する情の統率が同居していて指揮官の魅力となつた。そういった越後長岡人の性格が、山本五十六の人格を形成している。

海軍大佐時代の山本五十六





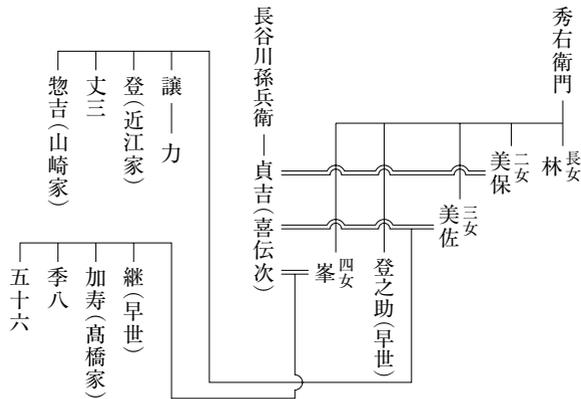
「神田薬師（少彦名神社）の祭礼
で神楽を兄や姉に連れられて見る
図一」
（水島爾保布画／日本互尊社蔵）

五十六の誕生

高野五十六、のちの山本五十六は、明治十七年（一八八四）四月四日、新潟県古志郡長岡本町大字玉蔵院町（長岡市東坂之上町三丁目）第三十一番戸に生まれた。父は旧長岡藩士族高野貞吉、母は峯みねといい、五十六は六男であった。五十六という命名の由来は、父貞吉の五十六歳のときの子どもであったことにちなんでいる。

高野家は旧長岡藩では百二十石取りの侍であった。代々儒学者の家柄で槍術師範も兼ねていた。明治三十二年十一月一日に剣術家の渡辺昇が根岸信五郎とともに長岡にきていて、ちょうどそのころ長岡に滞在していた小松宮こまつのみやに槍剣の試合を見てもらおうとなった際、七十一歳の高野貞吉が出場している。そのときの高野貞吉は槍術風伝流・剣術直心流・弓術雪荷流の皆伝を名乗っている。ちなみに渡辺昇と根岸信五郎は斎藤弥九郎門下の神道無念流の剣士であり、北

高野家系図



越鉄道開通間もない長岡を訪問していた。渡辺昇は子爵、根岸は旧長岡藩士族出身であった。

五十六は母校阪之上小学校で開かれたこの大会を見ているはずなのだが、記録にないところをみると、高齢な父を自慢する気になれなかったのかもしれない。

実は母の峯は貞吉の三番目の妻。夫から十七歳も年下の峯。その一番末の子が五十六であった。父の貞吉は同藩士長谷川家から養子に入っており、家つきの娘とつぎつぎに結婚し、三番目の妻の峯は高野家の四女であった。姉の三人はいずれも病死し、先妻の子どもと峯との間の子どもを二人は苦勞して育てあげる。この複雑な家庭環境が、幼少期の五十六に大きな影響を与えたことは否めない。

五十六の出生について、父は日記に「小原隠居来り囲む。二戦目妻、虫気づき、産婆迎に参る。正午出産、男子なり」と記している。囲碁か将棋を指しているとき、妻の峯が産気づいたのであわてて助産婦を迎えにいき、生まれたのが五十六というのである。そういえば後年、五十六の将棋好きは無類のものであったから、父からの趣